

共同研究プロジェクト「ペルシア語文化圏の歴史と社会」2009年度第1回

「古代から見たペルシア語文化圏」

日時：2009年7月26日(日)14時～18時

場所：AA研マルチメディア会議室(304)

内容：

- (1)「ゾロアスター教系英雄伝説はどこまで遡れるか」春田晴郎(AA研共同研究員・東海大学文学部)
- (2)「貨幣からみたサーサーン朝ペルシアとイスラームのはざま」津村眞輝子(古代オリエント博物館)

内容の要旨：

ペルシア語文化圏の歴史において、古代は特別な位置を占めている。イスラーム以前をジャーヒリーヤ(無明時代)として否定的にとらえるイスラーム史観に対して、たとえばイランにおいてはナショナルなものを古代イランに求めようとする傾向がある。しかし、「ペルシア語文化圏」を設定することによって、国民国家的な枠組みを離れた場合、古代をどのように考えたらよいのだろうか。このような問題意識からこの研究会を組織した。

春田報告は、「文化圏」を、英雄伝説を共有する地域ととらえ、最新のゾロアスター研究の成果を踏まえて、ゾロアスター系の英雄伝説の起源とその発展を明らかにした。今や、ゾロアスター教はゾロアスターから単線でアケメネス朝を経てサーサーン朝へと発展して行ったものではなく、多様なゾロアスター教がアケメネス朝期に広い地域に広がっていたと考えられている。したがって、ゾロアスター系の英雄伝説もさまざまな起源をもちながら、今日知られているような形に再編されてきたのである。特に、アヴェスターに現れないグーダルズ、ギーヴ、ロスタム等が興味深い。春田氏は特にパルティア時代にモデルが存在したと考えられてきたグーダルズを取り上げ、同名の王の即位(前91年)以前に、ニサー文書やビーソトゥーンの浮彫などにこの名前があることを指摘し、先にグーダルズ伝説が存在して、それにあわせて王がこの名前を名乗ったと考えるべきと述べた。また、グーダルズに関する『王書』のなかのロマンス物語が、古代ギリシアのアテーナイオスのロマンスに酷似していることを指摘した。結論として、こうした英雄伝説は、神官物語と民間英雄伝説もしくはロマンスとで、相互補完されながら形成されたのではないかという見通しを示した。

津村報告は、イスラーム初期に用いられたアラブ・サーサーン貨に関するものであった。イスラーム誕生以降、696年にウマイヤ朝アブド・アル＝マリクによって通貨改革が行われるまで、アラブたちも既存の貨幣制度を踏襲して貨幣を用いてきた。その貨幣をアラブ・サーサーン貨と呼び、具体的には、フスラウ2世型式、ヤズデギルド3世型式、アラブ為政者名の3種に大別できる。したがって、サーサーン朝型式の貨幣であっても、さらにはサーサーン朝君主の名があっても、イスラーム期に発行された貨幣の可能性はある。特に

顕著なのはフスラウ2世(在位 591-628)型式とヤズデギルド3世(在位 632-51)型式であり、前者は大量に流通して信用度が高かったことから、後者は最後のサーサーン朝君主で型が存在したことから、利用されたと考えられる。津村氏は、さらに、新疆ウイグル自治区のウチャにおいて一括で出土した6世紀末から7世紀後半の918枚の貨幣の分析を通じて、サーサーン貨、アラブ・サーサーン貨に含まれるカウンター・マークと擦痕の関係について論じた。擦痕は長さ1~2cm、幅3~5mmの明確な傷であり、主に貨幣の裏面につけられている。そして、擦痕のある貨幣には必ず人間の横顔や動物の形をしたカウンター・マークが押されている。結論のみ言えば、貨幣の質を確認するために擦痕がつけられ、確認ののちに検印としてカウンター・マークがつけられたと考えられる。つまり、擦痕とカウンター・マークはサーサーン朝の領域から離れた地域でいかにその貨幣が用いられたかを示す貴重な証拠なのである。貨幣が新疆で出土したことも合わせて、サーサーン朝の伝統がいかに広域に及んでいたかを示す報告であった。

2つの報告を通じて明らかになったのは、現在、「古代イラン的」とされている要素は、さまざまな起源を持ち、後代への影響の与え方もさまざまであるということであった。しかし、確かなことは、ペルシア語文化圏の歴史を考える上で、古代を無視することはできないということであり、今後のさらなる共同研究の必要性を痛感した。

(文責：近藤信彰)